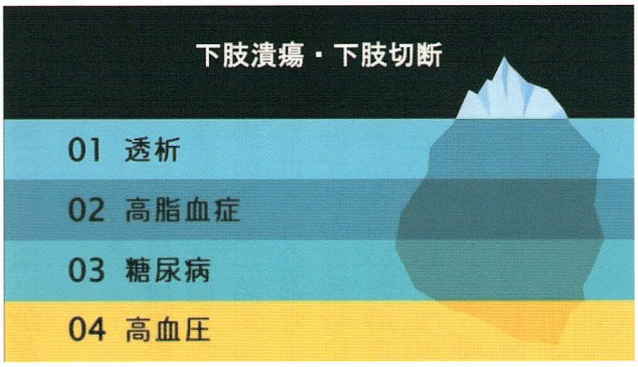
勉強部屋＆たからものたち

足を守る秘訣　透析患者のための下肢切断予防講座

岡村病院　心臓血管外科 救足センター長 岡村高雄

2024年6月24日NPO高知県腎臓病患者友の会総会における記念講演を会報に記載したものを高腎会と岡村病院のご厚意により転載し、加筆しました。ありがとうございます。まずは知ることからはじめましょう。

当院では2015年に救足センターを立ち上げ、下肢救済のための活動に力を入れております。今回、「下肢切断回避のための3つの秘策」として、「知識は一生の宝」「善は急げ」「餅は餅屋」の3つをテーマに解説していきます。



知識は一生の宝

まず、病気についての知識を深めることが重要です。高齢化により、血管障害を発症しやすい患者が増えており、とりわけ長期透析患者さんは合併症を複数抱えやすい傾向にあります。感染が合併症を引き起こし、その結果として約6割の患者さんが切断に至ります。症状がなくても、半数の患者さんが急に足に傷を負い、わずか2週間で壊疽が進行することがあります。

足に傷ができると、まず皮膚科を受診される方が多いです。次に整形外科へと回ることが一般的です。しかし、本来は心臓血管外科に相談することが適切です。特に運動量の少ない方、糖尿病患者、透析患者は足に傷ができやすく、また75歳以上の高齢者や歩行が困難な方、心臓病を患っている方は、2年後の生存率が低くなるリスクが高いです。

善は急げ

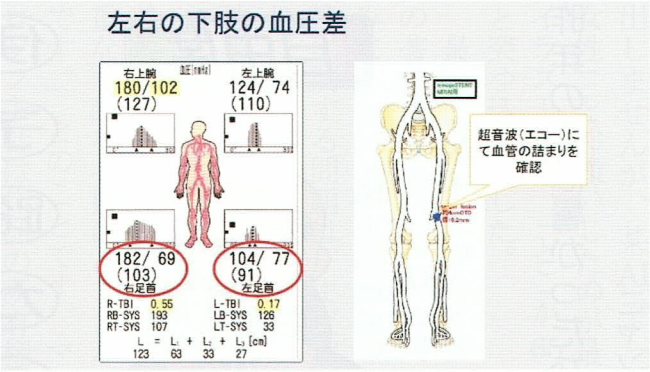
足の血管写真を撮影すると、膝から下の血管が狭窄しており、足先まで血液が十分に流れていないケースが多くあります。早期に血管手術を受けることで、ある程度血流を改善し、切断を回避できる可能性が高まります。

足に傷を見つけたら、原因を迅速かつ正確に調べ、早急に処置することが重要です。実際には1～3か月間様子を見られる方が多いですが、見た目では診断が難しいケースもあるため、専門的な設備が必要です。この

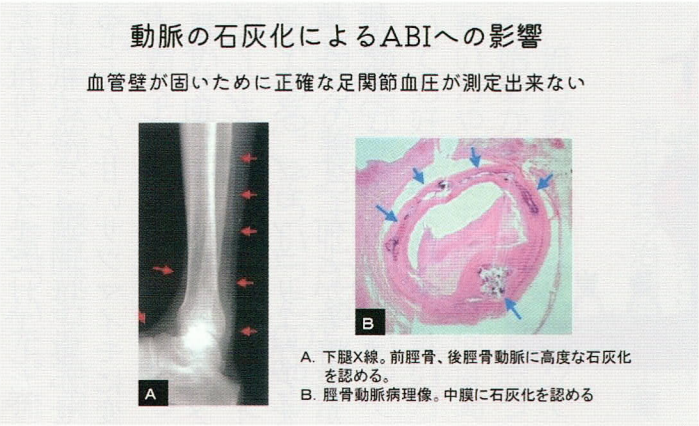
ような背景から、救足センターを設立しました。

餅は餅屋

検査には「三種の神器」とされる方法があります。血圧脈波測定検査（ABI測定）、超音波検査、皮膚還流圧測定（SPP）です。ABI測定では左右の足の血圧を測り、左右の血圧差から血流の状態を把握します。

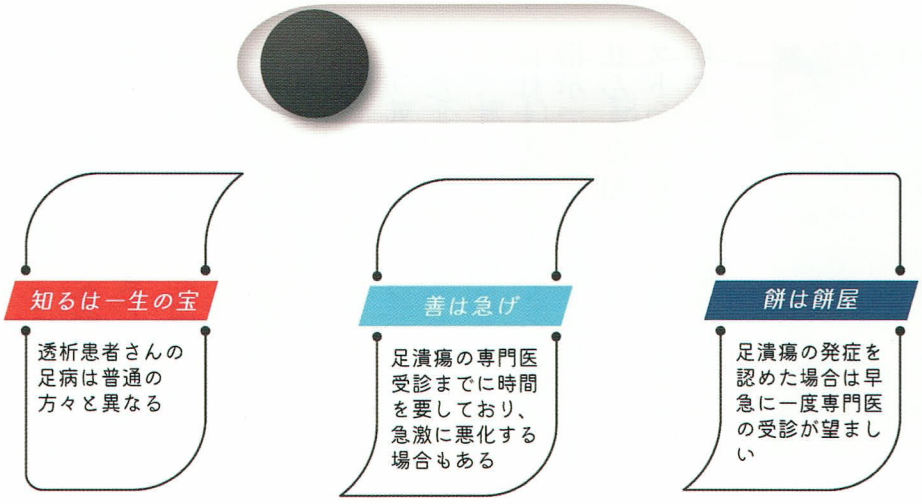


透析患者さんには動脈石灰化が見られ、血管が骨のように白く映る特徴があり、通常のABI検査では判定が難しいため、足の親指で測定するTBI検査が適用されます。



また、多くの方が受けたことのない検査法として、皮膚還流圧測定（SPP）があります。この検査では皮膚表面にレーザーを当てて赤血球の流れを観察し、血液の流れを可視化します。SPPの値が40 mmHg以上ならば傷は治りやすく、40 mmHg未満の場合、治癒が難しいとされています。

さらに、下肢超音波検査（エコー）を用いて、足の甲への血流状態を確認することができます。この検査は技術と専門知識を要するため、実施できる施設は限られています。実際、ABI検査以外の検査を行っている施設は全国的にも少ないのが現状です。

救足センターではホットラインを開設し、県外からの患者さんからの問い合わせにも対応しています。治療後、遠方の患者さんが当院への通院が難しい場合、当院のスタッフが高知県内の病院を訪問し、治療後のフォローを行っています。また、勉強会も定期的に開催しており、全国各地から医師やスタッフが参加しています。高知県内の病院でも講演を行っており、新型コロナウイルスの感染が収束しましたら再開する予定です。

最後に、患者さんの足の傷は診断が難しいため、もし足に傷ができた際には、できるだけ早く、一週間以内に専門機関での診断を受けることが非常に重要であることを強調いたします。